

「おなじぬれ」・「いとくなき手」補考：『蜻蛉日記』の本文批判

今西，祐一郎
九州大学教授

<https://doi.org/10.15017/8903>

出版情報：語文研究. 100/101, pp.27-37, 2006-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「おなじぬれ」・「いとぎなき手」補考

—『蜻蛉日記』の本文批判—

今 西 祐 一 郎

—

左大臣源高明が藤原氏の陰謀によって失脚した安和二年の五月の記事である。

兼家は物忌みと六月の御嶽詣でに備えての長精進を兼ねて山寺に籠もった。山寺は上巻、天曆八年冬に、横川にものすることありて登りぬる人」と記されたのと同じ、比叡山横川の法華堂であったかもしれない。

大雨につれづれをかこっていた留守居の道綱母のもとに、兼家から「いとあやしく心ほそき所になん（粗末で寂しい庵室で精進している）」といった文が届けられた。それに対して道綱母は、

時しもあれかくさみだれの水まさりをちかた人のひをもこそふれ

という返歌を送る。するとその返事に、兼家からふたたび、

まし水のましてほどふるものならばおなじぬれにておりもたちなむ

という歌が届いた。

前の道綱母歌は、「よりによってお籠りの時にこんな大雨になって、遠い山寺にいるあなたが帰京できず日が経ったらどうしよう」といった内容で、諸注おおむね一致している。

しかし、それに対する兼家の返歌は、注釈者を悩ませてき

た一首である。この歌、桂宮本をはじめとする有力な伝本では、

ましみすのましてほとぶる物ならはおなじぬれにておる
もたちなむ

となつてゐる。

一見していかがかと思われるのは第五句「おるもたちなむ」であろう。「おるもたつ」などという言い回しは当時の日本語にもない。予想されるのは「降り立つ」という複合動詞に助詞「も」をはさんだ「おりもたつ」の誤られた形ということになるつか。「おりたつ」とは、たとへば

きくにだにやせわたるなる水なればおりたつ人ぞ思ひや
らるる
(清慎公集 五五)

のように、水の中に降りていく動作をいい、「おりたつ田子」という言い回しで、水田への立ち入りをいうことが多い。

ながめにはそらさへぬれぬさみだれにおりたつ田子のも
すそならねど
(和泉式部集 三五)

問題は第四句「おなじぬれにて」である。「ぬれ」は「濡れ」だろうか。だが、雨に「濡れる」という言い方は珍しくはないが、「濡れ」という名詞はあまり耳にしない。そのせいであろう、原文の「ぬれ」を「ぬま(沼)」の誤りとみなし、その改訂によって従来は解釈されてきた。すなわち「ぬれ」を「ぬま」と改め、さらに「ぬま」と改めた場合、「ぬまにて」ではテニヨ八が合わないのので、「にて」を「にも」と改めるという操作を施した上で、この歌は解釈されてきたのである。すなわち、

ましみづのましてほどぶるものならばおなじ沼にもおり
もたちなん

という本文で、その解の一例をあげれば、

水かさが増し、逢えずに過す日が重なるなら、その雨で
できた沼にいっしょに下り立つ、精進なんかやめてあ
なたの所へ下りて行くよ。(新編日本古典文学全集)

といったものである。

しかし、「ぬれにておりもたちなん」は、はたして「ぬま

にもおりもたちなん」という形に、「れま」「ても」と、一首のうち二カ所も誤写を想定し改めなければ読めない語句なのであるつか。たとえば「濡れ」という名詞が歌には珍しいとはいっても、『源氏物語』夕霧巻には、朝帰りした夕霧を、

女君のかかる濡れをあやしとがめ給ひぬべければ

(夕霧の北の方が夫の露に濡れた朝帰りをきつと不審に思われるだろうから)

といった文脈で「濡れ」が用いられている。したがって兼家歌の「おなじぬれ」を意味不明と決めつけ、端から原文の二文字(「れ」と「て」)を改めてまで改訂案をひねり出さなければならぬというほどではない。たとえば、未刊ながら『かげるふの日記解環』に先だつ大東急記念文庫所蔵の『蜻蛉日記草稿』に見える秋原宗固(江戸中期の歌人・和学者、天明四年没)の頭注には、

猶日をふるほどならば 女もこなたへわたりたまへといふ事にや おなじぬれは同じく雨にぬるゝ事にや 少し聞なれぬやうなり(注)

のように「同じ濡れ」という形のままでの解釈の可能性も示されている。この『草稿』は、「同じ濡れ」を「同じく雨に濡るゝことにや」と解しながらも、「少し聞なれぬやうなり」と疑問の余地を残すが、そういう言い方でそういう意味を表す例が、『蜻蛉日記』の同時代に見出される。

二

殿うせ給ひて、八講し給ひしついでに

君だにもおなじぬれとてのりの雨のふる心をもたづねつるかな

されば返し

のりの雨も涙にわかず神無月はてやくれやいとどなからん
(義孝集 六一・六三)

藤原義孝は、兼家の兄一条摂政伊尹の息という系図上の近さのみならず、『蜻蛉日記』そのものに父伊尹の薨去(下巻・天禄三年十一月)に加えて、本人の、兄拳賢とともに庖瘡による同日卒去のことが記されており(同・天延二年九月)、道綱母とは関係の深い歌人である。その義孝が「同じ濡れ」という語を詠んでいる。詠んだのは「殿うせ給ひて、八講し

給ひしついで、「すなわち父伊尹の薨じた天禄三年であり、それは兼家の「おなじぬれ」歌の三年後ということになる。

実はこの一首、『義孝集』諸本によって本文が大きく異なり、また歌意必ずしも平明ではないが、『新編国歌大観』の底本に採用された九州大学細川文庫本によれば、おおよそ

あなたまでが今日の雨に濡れて亡父の供養に参列してくださってうれしい。

といった内容かと察せられる。しかしこの「雨」はたんなる雨ではない。亡父供養の法華八講にちなんだ「のりのあめ(法雨)」、すなわち「仏の恵みの雨」である。

よそにきくたもとのみこそほちけれあまねくのりの雨
はそそげど
かへし

いつはらず心をよするのりの雨のそそぐしにぬるる
たもとか
(伊勢集 四四四・四四五)

「法の雨にぬれる」とは、仏の慈悲に浴することをいう。そしてそのことは、『法華経』薬草喻品の「一味の雨」にお

いてもっとも顕著に説かれる。

仏は平等に説きたまふこと、一味の雨のごとし。衆生の性にしたがひて、受くるところ不同なり。かの草木の受くるところ、おのゝことなるがごとし。

(『法華経』薬草喻品)

それは、いわゆる釈教歌においても、珍しい題材ではなかった。

法花経歌よみ侍りけるに、薬草喻品を

前僧都源信

おなじこと一味の雨のふりぬれば草木も人も仏とぞなる
(万代和歌集 一六四)

そして以下に掲げるように、「一味の雨」に「濡れる」ということが、和歌にもしばしば詠まれていた。

六日の夜、時雨などまめやかにするを、よぬなる
僧の経読むに、夢の世のみしらるれば

ものをのみおもひの家をいでてふる一味の雨にぬれやし

故土御門右大臣の家の女房、車三つにあひのりて
菩提講にまゐりて侍りけるに、雨のふりければ、
二つの車はかへりにけり、いま一つの車にのりた
る人、講に逢ひて後かへりにける人のもとにつか
はしける

よみ人しらず

もろともに三つの車にのりしかど我は一味の雨にぬれに
き (後拾遺集 一一八七)

小野宮に千日の講経供養せられしを、たびたび
ききて、はてに捧物、袈裟たてまつりしに

世にふれば君にひかれてありがたき一味の雨にちたびぬ
れぬる (周防集 七三)

このように見てくれば、「同じ濡れ」とは、法華経にいう
「一味の雨」をふまえた表現であること、明らかである。
「一味」とは「万物に平等に」の意、したがって「一味の雨
に濡れる」とは「同じく濡れる」、すなわち「同じ濡れ」だ
からである。

ふたたび『蜻蛉日記』にもとれば、『蜻蛉日記草稿』が説
いたように、兼家歌「おなじぬれ」は「同じく雨にぬるゝ事」
の謂いであるにせよ、しかしその「雨」は単なる「雨」では
ない。それもまた、義孝歌の「おなじぬれ」がふまえたのと
同様の、法華経薬草喻品に言う「一味の雨」ではなかったが。
一首が物忌みと精進のために籠っていた山寺の兼家から届け
られた詠であることを考え、加えてその山寺が法華経を根本
經典とする比叡山の横川法華堂であったとすれば、ましてそ
の可能性は高い。とすれば、

ましみずのましてほどふる物ならばおなじぬれにており
もたちなむ

は、「これ以上雨が降り続くのなら、いっそのことありがた
い一味の雨に濡れて下山することを考えよう」といった内容
の歌ということになる。

従来の解釈が拠った「同じ沼にも」という改訂本文では、
その「沼」への改訂の根拠を、

「五月雨」で出来た「沼」として、贈歌に応ずる。

と説くが（新編日本古典文学全集）、この道綱母・兼家の贈答において、「沼」を持ち出す必然性は希薄である。なぜ「沼」でなければならぬのか。

時代は下るけれども、「同じ沼」でも、

やどことにかはらず見ゆるあやめ草さのみや同じ沼に引
きけん
（月詣和歌集 四一七）

やどことにふけるあやめのかはらぬは同じ沼にや誰も引
くらん
（田多民治集 四四）

という詠み方であればよく分かる。菖蒲の節句に人々は「沼」に「おりたち」て菖蒲を引くの常としたからである。

沿菖蒲

たがためとまだしらぬまにおりたちて引く手もたゆくあ
やめ刈るらん
（実材母集 七四〇）

それに較べて、山寺に参籠中の男から「精進なんかやめて

あなたの所へ下りて行くよ」（新編全集）という意味で、「同じ沼にもおりもたちなむ」（その雨でできた沼にいつしよに下り立とう）（同）と言ってきたというのは、どう考えても筋が通らない。

信頼できる古写本を欠く『蜻蛉日記』の本文は、契沖以来、多くの研究者の手によって本文改訂の試みがなされ、それによつて読解可能となつた箇所は枚挙に暇がない。しかし、中には「かの元本（モトノホン）に検て（トク）按へば中（ナカ）に元本の勝（カチ）たる処も見え」と田中大秀がその著『蜻蛉日記紀行解』で指摘したように、もとの本文のまま意味が通じる、勇み足の改訂案も散見する。

ここに取りあげた「同じ沼」もその一つと見なしたい。この改訂案は、契沖自筆の書き入れには見出されない（『契沖全集』所収「水府明德会彰考館蔵蜻蛉日記契沖自筆書入本」というが、彰考館本、阿波国文庫本、松平文庫本など、『蜻蛉日記』本文研究において古本と見なされる諸本にすでに見え、また近代以前に出版された唯一の『蜻蛉日記』全注釈で以後の本日記本文校訂に大きな影響を及ぼした『かげろふの日記解環』も「おなじぬま」に作る。

近代の諸注釈書は、そのような伝統的な改訂案の影響から脱することができなかった。

「おなじぬれ」に見たように、変えなくてもよい本文を変えるのとは逆の例、すなわち一応読めはするものの、そのままでは文脈の不自然な本文がそのままで解釈されている場合もある。

それは、「おなじぬれ」のすこし後の記事にある。

安和の変で失脚した左大臣源高明の西宮邸は日ならずして焼亡、北の方愛宮も尼になつて桃園の自邸に移り、「いみじげにながめ」る日々を送つていたという。愛宮は兼家の異母妹で母は醍醐天皇皇女雅子内親王。その同母兄で出家して多武峰にいた藤原高光は『多武峰少将物語』で文学史に名をとどめている。道綱母はその愛宮に「多武峰より」と、出家していた愛宮の兄高光の名をかたつて長歌を贈つた。やがて、それを道綱母のしわざと察知した愛宮から返事が届けられる。

吹く風につけて物思ふあまのたく塩の煙はたづねい
ですや

とて、いとよなきき手して、うす鈍の紙にて、松の枝につ
けたまへり。

問題は、「いとよなきき手」である。今日多くの校注書が底本に採用する桂宮本では、この箇所まぎれもなく「いとよなき」と読める。「いとよなき」は「いとけなき」と同じく、幼く幼稚なさまをいう語で、この箇所のように「手」すなわち筆跡についていえば、未熟で達筆とはいえぬ字ということになる。とすれば、ここで道綱母は、内親王を母とし、左大臣北の方であつた女性に対して、字が下手だったことを明言していることになる。それは高貴な女性にたいして著しく礼を失する言葉ではあるまいか。

「北の方は、まだつら若かつたのであろう」と説明する注釈もあるが（柿本奨『蜻蛉日記全注釈』、杉崎重遠「愛宮考」^{注6}）の推定によれば、この安和二年、愛宮の年齢は二十六歳であり、「いとよなき」という形容はおよそ似合わない。

そのような本文に疑問をいだき、他本に目を転じると、明白に「いとよなき」と読める本文をもつのは、桂宮本以外の古本系では阿波国文庫本、そして版本で、神宮徴古館本、国会図書館本、無窮会神習文庫本、松平文庫本など古本系の多くは「いとよなき」となっている。もとより「いとよなき」では意味は通じず、おそらくそれは「支」を字母とする仮名「ぎ」が「与」を字母とする仮名「よ」と字形が似ているための誤読・誤写の結果であろう。しかしだからといって「い

ときなき」がただちに正しい本文であるということにはならない。視点を変えて考えれば、「いとときなき」という語形自体がすでに何かもつとまっとうな本文の誤読・誤写によって生じた可能性も否定できない。たとえば「いとときなき」の「き」に間違えられやすい他の仮名はなかったのだろうか。

左大臣北の方の書いた字を「いとときなき」ということはいかにも文脈になじまないのであるが、もし「北の方の字はすばらしい」という意味に取れる本文であれば、文脈的違和感と意味を表す語からの誤読・誤写で生じた本文だという可能性は考えられないであろうか。

五

「いとときなき」が他の有力伝本で「いとよなき」となっていることが物語るように、実は「き」の仮名は曲者なのである。「文」を字母とする仮名「き」「が」「与」を字母とする仮名「よ」に似るのと同じように、それは「尔」を字母とする仮名「に」にも往々にして酷似する。この事例については、すでに池田亀鑑『古典の批判的処置に関する研究』第二巻に収められる「日本古典作品に於ける本文轉化の諸類型とその

實例」にも指摘されているが、さらに具体例をあげれば、『古今集』巻二十の、

まがねふく吉備の中山帯にせる細谷川の音のさやけさ

(一〇八二)

という歌は、平安時代の古筆として著名な筋切本や元永本では、第三句「帯にせる」を「帯きせる」に作り、顕著な違いを見せる。「きせる」ならば、それは「着せる」で「帯」と無縁ではなく、一応意味は通りそうでもあるが、この歌が古注以来指摘されているように、『萬葉集』の

大君の三笠の山の帯にせる細谷川の音のさやけさ

(巻七・一〇二二)

の「異伝もしくは改作応用」であり、また催馬楽「真金吹く」に

真金吹く 吉備の中山 帯にせる

とある(片桐洋一『古今和歌集全評釈』)ことからすれば、

「帯きせる」は「帯にせる」の「き」に「」の誤写・誤読から発生した形であることは容易に想像される。

また、『伊勢物語』定家本五八段に、

葎おひて荒れたる宿のわびしきはかりにもおにのすだく
なりけり

という歌がある。この歌の第四句「かりにもおに（鬼）の」が、塗籠本に代表される異本では、「かりにもおきの」になっている。この点につき、塗籠本を底本に採用した南波浩校注の日本古典全書『伊勢物語』は、底本「をき」を採って、

諸本「おに」「をに」とあるが、塗籠本・泉州本・谷森本には「をき」「おき」とある。をきは、紫式部日記にも「御物怪のいみじうこはきなりけり。宰相の君のをき人に、系いかう（叡効律師）を添へたるに」とあるやうに、招禱人（ユギビト）、物の怪を招き出す験者（）の意である。

と、補注で説くものの、それに続いて

ただし底本では明白に「をき」とあるが、支（き）とル（に）の草體がきはめて類似してゐるので、何れか一方の誤字とも考へられる。

と、「に」き」の誤読・誤写の可能性にも触れている。

このような事例を念頭におけば、「いとなきき」の場合も、そのままの形で意味が不自然であるのなら、それは「いとになき」からの転であった可能性が十分考えられる。その可能性を裏付けるように、岡山大学に所蔵される池田文庫本には、まぎれもなく「いとになき」とあり、その「に」の傍らに「二無」という漢字を振ってある。「いとになき」とは、「に」なし（二無し）すなわち「他に匹敵するものがない」の形容詞連体形に副詞「いと」を冠した語。これならば左大臣北の方愛宮の手跡を「いとになき手」つまり「他にくらべようもないほどすばらしい字で」と記したことになり、文脈の違和感は解消するであろう。

この「いとになき」という語形は、『うつほ物語』に

いとになきおこなひ人（忠こそ）

いとになき所（吹上・下）

いとになき伝へ（楼の上・下）

など見え、『源氏物語』にも、

御使ひにさかつきたまひて、祿いとなし。(鈴虫)

いにしへの、音などいとなき弾き物どもを、わざと儲けたるやうにはあらで、次々弾き出で給ひて。(椎木)

とあるほか、

賭物どもいとなくいでどみあへり。(賢木)

よき女房などはもとより多かる宮なれば、(中略)いとなくけはひあらまほし。(絵合)

中将などのいとなく思ひ侍りけんかねことに。(常夏)

中宮より、白き御裳、唐衣、御装束、御くしあげの具などいとなく。(行幸)

うちのおましいいとなくしつらはせたまうて、御着まらせ給ふ。(同)

ぎしきいとなくもてかしつき給ふ。(真木柱)

何事にも世にかたき物の上手におはして、いとなし。(若菜上)

いとなくかしつききこえ給ふ。(若菜下)

みな御手をはなれぬものの伝へくいとなくのみあるにぞ。(同)

と頻出する表現であり、『蜻蛉日記』が用いても何ら不自然な言い回しではない。

そして、「いときなき」が「いとなき」からの誤読・誤写によって生じた本文であるという蓋然性は、『蜻蛉日記』において他にもそのような事例があることよって保証されるであろう。

柿本奨『蜻蛉日記全注釈』下巻付載の労作「誤写一覽」によれば、「いとなき」から「いときなき」なきへの転訛と同様の例は、他にも、

いとおほきなることなくて侍らむに(き)は

(中巻・安和二年閏五月)

いかなる心心にてさるに(き)かありけむ

(同・天祿二年六月)

きよげなるかいねりに(き)むらさきのおりものかさな

りたるそでぞさしいでためる(下巻・天延二年十一月)

のよつに見出される。いずれも「支(き)」「と」「尔(に)」「の」草体の類似が引き起こした本文の転訛である。

「いとぎなき」という誤られた語形が、それでも一応意味は通じるので、従来そのままに解釈されてきたのであった。「読める」語形も、場合によっては本文批判の俎上にのぼすことに臆病であってはならない。

後記

本稿の趣旨は、筆者校注の新日本古典文学大系所収『蜻蛉日記』の解説（一九八九年）において述べたところである。しかしその際、紙幅の制約あつて用例を提示しての推論を示すことができなかったため、本誌「迫野教授退任記念号」への寄稿にあたり、用例を掲げ判断の根拠を示したものである。

注

注1 以下、歌番号は『新編国歌大観』による。

注2 大東急記念文庫所蔵「古寫古版物語文学書総覧」のマイクロフィルムによる。

注3 『藤原義孝集本文・索引と研究』（田坂憲二・田坂順子編著）によれば、宮内庁書陵部蔵の二類本系統では、

殿うせたまひてのちはかうしたましに

なみにたにそおなしみとりの雨ふれはこゝろをもかへたつ
ねつるかな

みやの御かへし

のりの雨もなみだもわかす神無月きえてしくれやひまな
かるらん

とあつて、「おなじぬれ」の語はない。また九州大学本にも、
初句「きみだにも」に、「なみだがは」、「なみだにも」の異文
を示す傍記がある。

注4 訓みは正保四年刊『和訓法華経』による。

注5 高山郷土資料館本による。

注6 『勅撰集歌人伝の研究』（昭和十九年、東都書籍株式会社刊、昭和六三年、新典社再刊）所収。

（いまにし ゆづいちろう・本学教授）